スタディーツアーを終えて

関西学院大学　経済学部　一年　瀧川奏子

２月２２日から３月７日までの２週間、本当に楽しかった。ケリオバレーの絶景、野生動物を初めて見たマサイ・マラのサファリなどケニアを堪能した。まず、スタディーツアー参加の機会を与えてくださった木村先生、CORE 事務所の喜田さん・松本さん、マトマイニチルドレンズホームの菊本さんに心から感謝申し上げます。そして、共に旅をした酒井さん、梶山さん、長野さん、本当にありがとうございました。

なんといっても一番心に残っていることは、三日間のホームステイだ。

初日は、ホストファミリーと面会した後、道直しが始まった。私は、まったく農業体験がなく、鍬を使ったこともなかった。固い地面を掘る作業は私にとっては難しく、お母さんたちが何度も丁寧に教えてくれた。土のう袋一つさえ重くて、自分の力のなさに失望した。大丈夫かと聞かれ、ハクナマタタ(問題ない)と嘘でも言えないことが情けなかった。その反面、ケニアの女性たちはかなりたくましかった。暑いなか Energy！Energy！と言いながら働くケニア人女性のパワーに圧倒された。

一日目の作業が終わり、村に帰る。私の泊まった村にはたくさんの子供がいて、どんな時も私への訪問客が絶えなかった。まるで有名人になったかのようだった。ムズング(白人)！ムズング！と珍しそうに私の髪で遊び、抱きついてくる子供たち。本当にかわいかった。あの無邪気な笑顔が一番の宝物になった。彼らは、私が日本から持ってきたチュッパチャップスを少し舐めて、ポケットに戻し、家に持って帰っていった。兄弟に分けるのだろうか、親に自慢するのだろうか。その健気な姿も忘れられない。

そのあと、お母さんとスクマを畑から取りに行き、一緒にウガリを作った。夕飯はウガリとスクマウィキ。残念なことに、ケニア料理は最後まで好きになれず食べられなかった。そして、ぼっとん便所も桶一杯の水浴びも不便でつらかった。夜は 5 歳のホストシスターとベッドをシェアした。

二日目は、道直し完成の日。前日以上に村人たちは働いていた。子どもたちが安全に学校に行けるように作った道は村人自らの手で舗装された。物資をあげるだけの援助ではなく、村人の意識を高める援助なのだな、これこそ未来につながる道作りだと思った。道直しが終わり、私はホストブラザーのサムと散歩をした。サムは１４歳なのだが、彼とは音楽から政治の問題までたくさん話した。とてもしっかりしている長男で、医者になっていつか日本に行くと私に言った。

三日目はキムムという家から少し離れたところまでお母さんの親戚回りに行った。歓迎の連続で、彼らにとっては高級品の魚をおじいさんが取ってきてくれ、おばあさんは産みたての卵を私にくれた。私を本当の孫だよ、と言い手厚くもてなしてくれた。家族みんな

が、一つの皿に乗った魚をとても嬉しそうにありついた。その夜見た満天の星は人生で初めて見るほどきれいだった。この美しい星空が当たり前の彼らは、じゅうぶん幸せに違いないと思えるほどだった。

ホームステイを終えてからは丸一日下痢で苦しんだ。前日のチャイの飲みすぎのせいだったのだろうか。ホストシスターや村人から Give me sweets Give me sweets とねだられ、ストレスも感じた。彼らの貪欲さ、率直さに最初はひどく動揺した。また、ケニア料理が食べられなくて、日本から持ってきた非常食を隠れて必死に食べたこともあった。何をしていても子供たちから見られていたため、数少ない非常食を渡すにはいかなかったのだ。

しかし、つらかったことも全部今では良い思い出だ。何より、ケニアの人々との交流が私にとって一番の財産だ。How are you？と元気に話しかけてくる子供たち。よくお母さんの手伝いをする少年、少女。陽気で働き者のお母さん。優しいお父さん。自分ができることは何でもする。とても正直で温かい国民だ。貧しくて「かわいそう」と片付けてしまうことは大間違いだ。水も電気も整っていなくても、悲壮感なんてちっともない。

マトマイニ・チルドレンズホームの訪問では、菊本さんが様々なお話をしてくださった。東アフリカ最大のスラム、キベラに行った晩、「今は政治家が権力を握っているが、メディアと中流・下流階級の人々が国をよくするという意思を持ち、手をつなげば、必ずケニアは変わる」「スラムから抜け出せないのは、彼らが方法を知らないだけで、ケニアは人材の宝庫だ」とおっしゃった。自分の手で生活を向上させるきっかけを作ること。道普請人の活動も、それに通じるものがあると思う。日本人には到底及ばぬような底力が彼らにはあると、確信した。

最後に。よく分からなくなったことがある。こっちが必要だと思った援助を、彼らは必要だと思っていない場合が少なくないように感じた。例えば、日本人がスラムに建てたトイレが、そのまま放置され、使えない状態になっている。少しでもきれいにしようという意識を持ち、掃除をすればいいのに。しかし、彼らにとっては清潔を保つ意識がないのだ。だからといって、このままでいいわけがない。『支援』は一方的であってはならないことは事実だ。

「ケニアはかわいそうな国ではありません」菊本さんの一言が今でも心に残っている。この言葉にヒントがあるかもしれない。

これからじっくり、自己満足に終わらないボランティア、本当の支援を考えていきたい。

ホストマザーとホストブラザーのサム

村の子供たち

村人と道直し

マトマイニ・チルドレンズホーム